

「本当の隣人」

ルカによる福音書 第10章 25節～37節

説教 岡村 恒 牧師

「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」(36節)聖書の中でよく知られたたとえ話〈良いサマリヤ人〉は、キリスト教的隣人愛の本質を表わすものだと言われて来ました。しかし私たちは、「行って、あなたも同じようにしなさい。」(37節)と言われて主イエスの言葉をもう1度聞き直したいと思います。

一人の律法の専門家が主イエスのところに来ました。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」(25節)私たち人間が抱える究極の問いをぶつけました。律法の専門家ですから答えも持参していました。主イエスが「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」(26節)とお尋ねになると、直ぐにスラスラと答えが出ました。「神を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」。ユダヤ人であれば当たり前という言葉で、「正しい答えだ」と主はおっしゃいました。

ここから、物語はいっきに深みへと進みます。この人は律法を守り、神に仕え、隣人にできることを精一杯して、誠実に真面目に生きてきたのです。しかし、なお満たされないものがあるこの人に、主は言われました。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」この答えに対してこの人は、「自分を正当化しようとして、『では、わたしの隣人とはだれですか』と言った。」(29節)本当に神を愛し、隣人を愛して生きるということがどういうことか、彼には分からなかったのです。

エルサレムからエリコへ下って行くある人が、追いはぎに襲われて半殺しの目にあった。そこを通りかかった祭司、レビ人は見て見ぬふりをして避けて通って行った。しかし、あるサマリヤ人は憐れに思い、手当をして、宿屋に連れて行き、助けたという話です。エルサレムからエリコへの道は、標高差1,100m、道程27km程の下り坂です。神に仕える人の多くがエリコに住んで、エルサレムに登って神殿に仕えていたと言われます。祭司やレビ人が通ったのは偶然ではなく、いつものことですし、お互いに顔見知りだったかも知れません。主イエスは、私たちが生きるこの世界に目を留めて、本当の隣人になることができずにいる私たちの現実を描き出しておられるのです。

サマリヤ人はアッシリア征服の時代、支配者として入ってきた他民族と混血し、ユダヤ人からは忌み嫌われるようになった人々です。元々

は同じ民族でありながら、今は憎みあう間柄になっています。「だれがこの人の隣人になったと思うか。」(36節)そうおっしゃった主イエスご自身が、罪のゆえに滅びゆく私たちの隣人として地上に生き、全てを与え尽くして、私たちのために永遠の命を用意してくださいました。

〈良いサマリヤ人〉のたとえば、主イエスを指差しています。主は言われます、「行って、あなたも同じようにしなさい。」隣人になるということはある人が説明して、〈最も身近な人となる〉ことだと言いました。隣人、それは最も近くにいます。距離が離れていてもその人のことを思い、その人のために心を砕くなら、それは最も身近な人です。主イエスは、私たちひとりひとりの最も身近な人になってくださった救い主です。これが、聖書全体が語る福音(良い知らせ)の中身です。

多くの人に博愛精神をもって仕えなさいという話ではありません。神に愛され、主イエスに隣人となっていたいただいた者として、自分もまた誰かの隣人となる歩みに進み出れば良いのです。そうすれば、もっともっと神の愛の深さが分かるようになります。本当に大事なことは、初めに律法の専門家が尋ねたあの問いを、もう1度問い直すことでしょう。「何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」究極の問いに対して、主イエスは明確にお答えになりました。「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得る…」(ヨハネによる福音書 3章16節b)「神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」。(同 14章1節)これが答えです。

あなたはその信仰の生涯において、神がどのように永遠の生命を約束し、与えて下さっているかを知るようになる、と主イエスは言われるのです。「私に何が出来るでしょうか。」そう問いながらこの聖堂を後にしてみてください。主があなたの隣人となって一緒に歩いてくださっています。既に洗礼を受けて、主イエスと共に生き始めた人は、ここから〔誰かの隣人となる人生〕を歩み始めてください。まだ洗礼を受けておられない方は、今日、ぜひ知ってください。神のひとり子イエス・キリストがあなたの隣人です。あなたを生かし、造り変え、新しい人生を歩ませて下さる救い主です。このお方を信じて、新しい人生を歩み始めて下さい。

(記 説教要約奉仕者)